研究紀要　第9号　111－128頁　2001年3月
㈶とちぎ生涯学習文化財団　埋蔵文化財センター

栃木県の初現期の群集墳
－その動向について－

進藤（しんどう）　敏雄（としお）

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　「古式群集墳」につて
Ⅲ　県内各地の古式群集墳の様相
Ⅳ　考察
Ⅴ　おわりに

近年、調査例が増加してきた栃木県内の初現期の群集墳の動向を観察すると、それまで中期古墳の顕著な展開の見られなかった地域に出現するもの、当地の中期政権中枢部に出現するもの、この政権と密接な関係のもとに出現するものなどが存在し、その時期も含めて多様な展開の様相が明らかとなってくる。このような、初現期の群集墳のあり方が、当時の政治的・文化的動向をどのように反映しているのか検討してみたいが、本稿では、その基礎的な作業として県内各地の初現期の群集墳の様相を概観してみた。

Ⅰ　はじめに

近年、古墳の発生や、古墳時代中期の評価をめぐる研究が活況を呈しているのに対して、群集墳の研究はやや停滞気味である。次の時代へ向けて古墳時代が大きく変動する「後期」という時期を考える上で、群集墳がきわめて重要な位置を占めることは、今さら述べるまでもないことである。群集墳は、それを構成する個々の古墳自体は有力首長墳に比べれば、規模・内容ともに劣るものが多い。従って、集落跡同様に、一定の広い面積を調査して群全体を把握してこそはじめて、高い資料的価値が得られる性質の遺跡であると言えよう。こうした調査例が少なかった点が研究停滞の一つの要因になっていたといえる。

しかし、栃木県でもこの数年、大規模開発に伴う発掘調査が増加した結果、5世紀後葉から6世紀前半にかけての初現期の群集墳の調査例が蓄積されてきた。中には、群のかなりの面積を明らかにできた事例もあり、群集墳の実態を検討できる好資料が増えてきたといえよう。そこで、本稿では県内の群集墳のあり方を理解する一環として、5世紀後葉から6世紀前葉までの初現期の群集墳を取り上げ、中期後半の首長墓の様相とともに、その動向をおってみた。

Ⅱ　「古式群集墳」について

群集墳については、近藤義郎氏の論考（近藤1952）以来、実に多くの研究がなされてきたが、今日では群集墳を新旧二形態に区別して捉えるのが一般的である。だが、研究者の間でこの基準や、群集墳そのものの定義についても見解の相違が見られるので、代表的な論考に沿ってこの点を簡単に整理しておきたい。

石部正志氏は、それまでは主として後期群集墳を指すことの多かった「群集墳」の概念を再考し、中小の墳墓が密集する形態の古墳群が古墳時代全般を通じて存在することを指摘した（石部1979）。その上で、弥生時代の方形周溝墓の伝統を踏襲した形態の墳墓が古墳時代に入っても連綿として営まれ、やがて木棺直葬を主体とする円墳・方墳等になったものを「古式群集墳」、横穴式石室導入後の群集墳を「後期群集墳」と定義した。「古式群集墳」と「後期群集墳」の名称を用いて、群集墳の新旧の区別を明確にした論考としては、最も早い時期のものであろう。また、その後、群集墳の発生に政治的要因を重視する論考が増加してきたことに対し、氏は社会の政治的変革が共同体の集団墓の存在形態にまでは重大な変化をもたらしていないこと等を示して、群集墳の普遍性を再確認している（石部1992）。

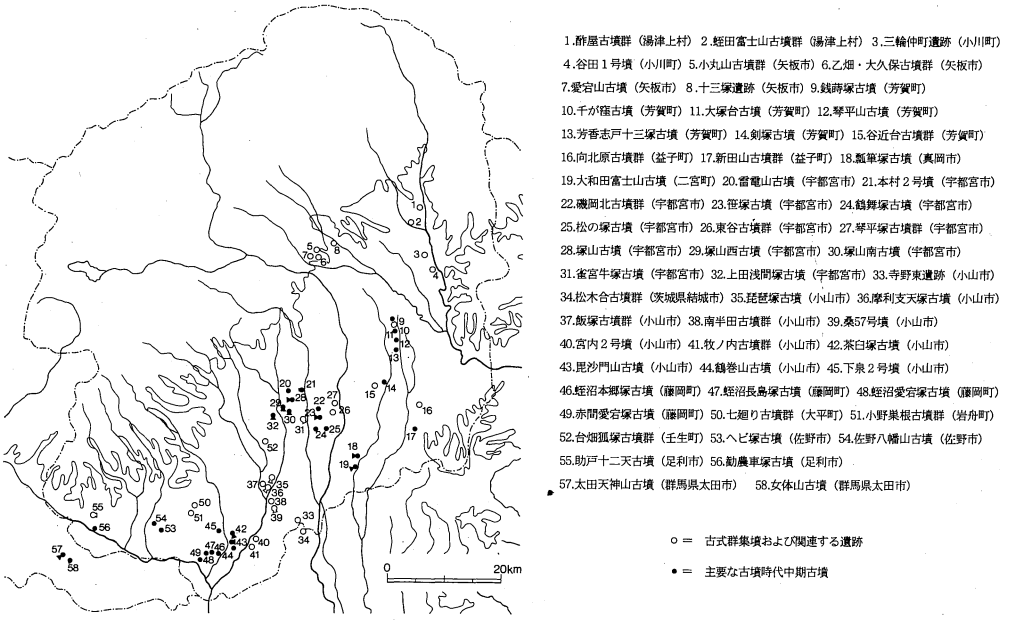
次に、群集墳の成立に政治的要因を重視する論考として、和田晴吾氏の一連の研究があげられよう。和田氏は、群集する古墳のうち、５世紀後半以降のものだけを「群集墳」として規定し（和田1992）、それ以前のものは「小型墳墓群」と見なして群集墳の範疇には入れないのである。なぜなら、和田氏は、群集墳とはヤマト政権による新興有力家長層の直接的掌握の結果生じたものであり、その時期を５世紀後半と推測するからである。そして、古墳時代後期前半を中心とする時期の、「木棺直葬のほかに多様な埋葬施設を有する」小型の円墳で構成されるものを「古式群集墳」、後期中葉から飛鳥時代初頭を中心とする畿内型横穴式石室を有する円墳で構成されるものを「新式群集墳」、それ以降のものを「終末式群集墳」として分類した。

栃木県では近年、古墳時代前期の群集する方墳の実体が明らかになりつつある[1]。しかし中期に入るとこうした小型の古墳は急激に衰退し、中期後半になって小円墳主体の古墳群が増加してくる。従って、形状の上では中期前半頃を空白期と見なし、群集する古墳を前後２時期に区別することが可能であろう。そこで本稿では、中期後半以降に出現したものを群集墳と理解することにする。従って、本稿で対象とする初現期の群集墳は、遺構の形態上はおおむね和田氏の定義する「古式群集墳」に近似したものとなる。そこで、次のような基準を設定してみた。

(1)　竪穴式系の埋葬施設、すなわち木棺直葬の墓壙、竪穴式小石室、箱式石棺などを有すること。

(2)　５世紀後葉から６世紀前半頃にかけて形成された古墳群であること。

(3)　主として小円墳（直径は10～30m程度が標準的）で構成される古墳群であること。



第１図　栃木県内の主要な中期古墳と古式群集墳分布図（進藤2000より）

なお、(1)の条件を満たすのは原則として発掘調査されたものであるが、未発掘の場合でも表面採集された遺物などから時期が推定できるものは可能な範囲で取り上げてみた。

Ⅲ　県内各地の古式群集墳

本県の古墳は、各期を通しておおむね鬼怒川や渡良瀬川支流の主要河川の流域ごとに展開することが明らかにされているため、本稿でもこの区分に従い北東から那珂川、小貝川・五行川、田川・思川、渡良瀬川の６地域に大別し、各水系ごとに様相を観察したい。

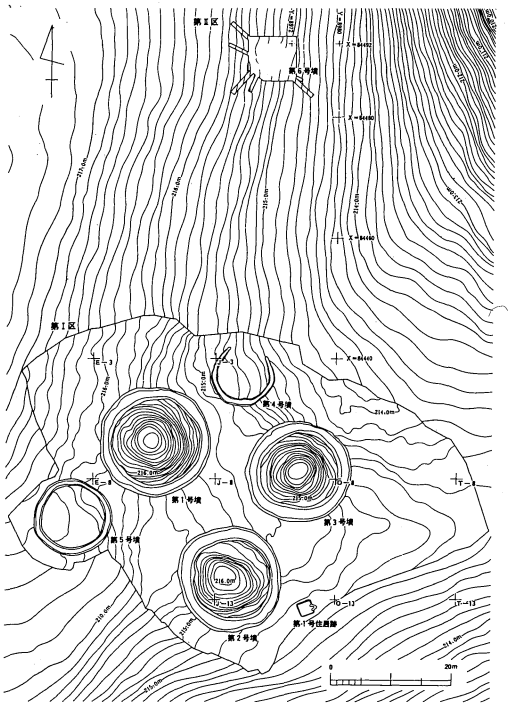
【那珂川水系】那賀川は、那須岳に源を発し、県東部を南流する。この水系で古墳文化の顕著な展開が見られるのは、那須郡湯津上村・同小川町周辺である。当地域は前期には首長墓クラスの前方後方墳が多数築造され、それらに伴う方墳群の存在(2)も近年明らかになってきた。しかし、５世紀に入ると、当地方の古墳築造は衰退し、５世紀後葉なって湯津上村酢屋古墳群（湯津上村教育委員会1978・長谷川1994）、同村蛭田富士山古墳群（大和久ほか1972）などの古式群集墳が出現する。前者は直径22～31ｍ大の円墳5基が調査され、最大の１号墳には南東に短い方形の突出部が付属する。主体部は、不明の３号墳を除いて竪穴式系であり、１号墳は墳端に３基の墓壙を設け、２・５号墳では板石による箱式石棺が確認された。５号墳からは田辺編年TK208段階と考えられる須恵器瓶や、三環鈴などが発見され、その他でも中期後葉頃の土師器椀・高坏脚部などが出土している。これらから当古墳群の築造時期は５世紀後半から６世紀初頭と考えられる。一方、蛭田富士山古墳群は同一群内に後期群集墳を含むタイプである。

主墳である蛭田富士山古墳は全長約40mの前方後円墳（帆立貝式古墳）で、中期後葉頃の築造と推定されているが、未調査であり詳細は不明である。群集墳としては、削平された円墳４基と、この円墳群の主体部およびその周辺から礫槨・粘土槨・竪穴式小石室・箱式石棺などが確認された。また、横穴式石室は８基分が発見された。D-14周溝の粘土槨からは無茎柳葉式および篦被鑿箭式鉄鏃や土師器高坏・甕などが出土し、５世紀後葉の築造と考えられる。古式群集墳としては５世紀後半から６世紀前半まで、後期群集墳としては６世紀後半以降７世紀代まで造墓が続いたと考えられる。この他、当地域においては、下侍塚古墳群に中期以降の古墳が存在する可能性も指摘されている（小森1999）が、発掘調査を経ておらず推定の域を出ない。いずれにしても酢屋古墳群などの古式群集墳は、二ッ室塚古墳（前方後円墳：全長46.5m）（辰巳ほか1975・長谷川1989）、川崎古墳（前方後円墳：残存長約49m）（大川ほか1989）、梅曽大塚古墳（前方後円墳：推定全長約50m）（三木1976）など、当地域における後期の大型古墳出現の背景を考える上で注目すべき古墳群であろう。

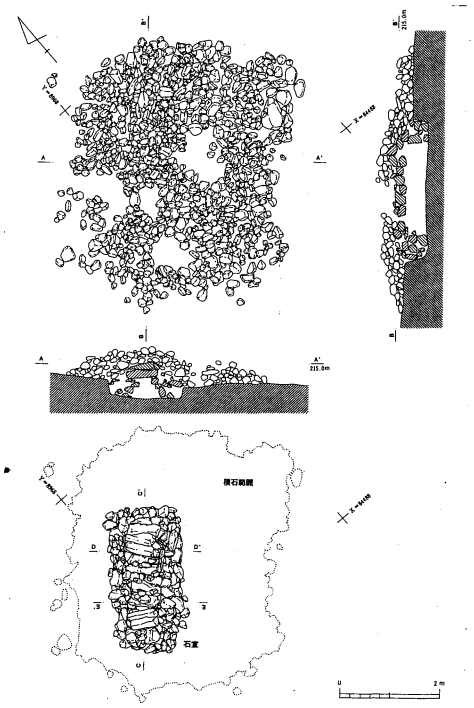
那珂川支流の内川水系では、現在の矢板市を中心とした一帯に群集墳が見られる。

当地では、前期には木幡神社古墳（前方後円墳あるいは前方後方墳：全長52m）（鈴木1981）や石関彦左衛門山遺跡の方墳（一辺約20m）、後岡古墳（一辺約13mの方墳）などが確認できるものの、明確に５世紀代前半に位置づけられる古墳は現在のところ確認されていない。５世紀後葉になると、矢板市十三塚遺跡（中村1991）で当時の集落跡が発掘され、1974・1988の両年度の調査で竪穴住居跡が25軒発見された。この集落では竪穴住居跡から鉄器が比較的多数出土し、鍛冶関連の遺物も発見されている。当時の周辺の開発状況を反映しているものと思われる。さらに続く時期には、十三塚遺跡南西の丘陵地帯に小丸山古墳群（進藤1995）、乙畑・大久保古墳群（岩崎1996）などの古式群集墳が形成される。ともに大規模開発に先立って発掘調査が行われ、古墳群の全容が明らかになっている。小丸山古墳群は円墳５基・積石塚古墳１基で構成され、円墳は互いに周溝外縁が接するほどに近接し、積石塚古墳は円墳群から北に50m離れて単独で存在する。円墳のうち３基（第１～３号墳）は、直径約15mで、周溝を巡らせ、他の２基（第４・５号墳）は周溝のみで無墳丘である（直径８～10m）。５基とも主体部は竪穴式の墓壙であった。また、積石塚古墳（第６号墳）は長軸5.2m、短軸4.4m、高さ0.7mの小規模な楕円形あるいは隅丸方形の積石を有し、この下から半地下式の竪穴式小石室が発見された。石室内からは直刀と鉄鏃が出土した。当古墳群は火山灰分析の結果、榛名山起源のHr-FA降下直後から築造が始まり、Hr-FP降下までの間に形成されたことが明らかとなった。これは、周溝内出土の土師器や、積石塚古墳出土の鉄鏃などの示す年代とも一致する。

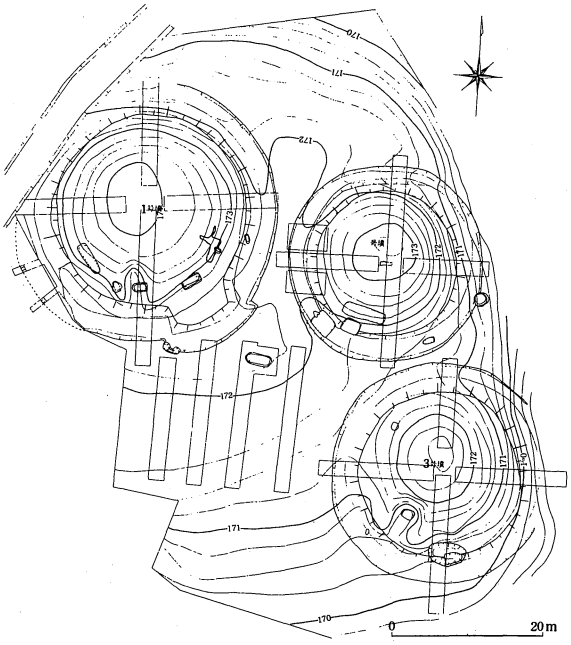
一方、乙畑・大久保古墳群は小丸山古墳群の南方に延びる丘陵尾根上に位置し、円墳３基、土壙墓１基で構成される。円墳はいずれも低平な墳丘に周溝を巡らせ、墳頂部に竪穴式の墓壙



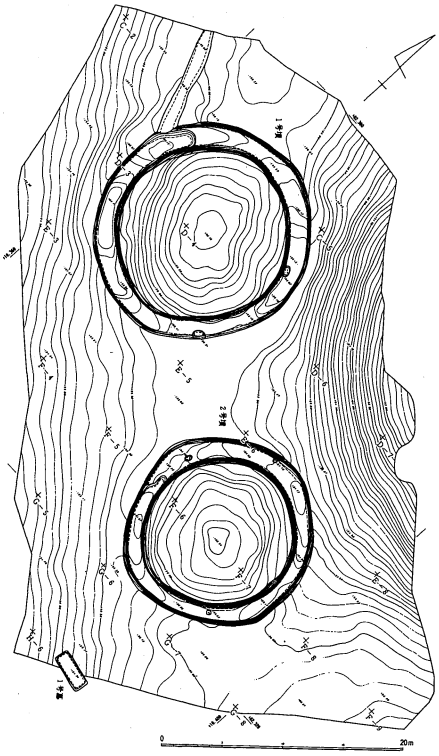
小丸山古墳群全体図



小丸山古墳群第６号墳



酢屋古墳群



乙畑・大久保古墳群（１号墳、２号墳、１号墓）

第２図　那珂川水系の古式群集墳（報告書より転載）

を持つ。築造年代は、２号墳の主体部出土の鉄鏃が６世紀初頭の形状を示し、３・４号墳の土師器・須恵器・石製模造品などの遺物も６世紀前半を降るものではない。また、周溝埋土中の火山灰が榛名山起源のHr-FPと考えられることから、当古墳群は６世紀初頭から遅くとも中葉の早い時期までに築造されたと考えられる。小丸山古墳群よりはやや早く形成が始まった群集墳である。

また、小丸山古墳群と谷一つ隔てて東側に存在した通岡古墳群（竹沢ほか1972）は、数基の円墳で構成されていたようであるが、東北縦貫道矢板インターチェンジ建設の際に1号墳が発掘調査されている。この古墳は復元直径19～20mの円墳で、東側の一部を除いて周溝が巡っている。主体部は墳頂の墓壙内に設けられた板石使用の箱式石棺であった。遺物は棺内出土の鉄鏃が中心で、その多くがの篦被鑿箭式である。鏃身の形状は小丸山６号墳のものに近い時期と考えられるが、全て台形関のようであり６号墳よりもやや溯ると考えられる。こうしたことから当墳は６世紀前葉頃に位置づけるのが妥当であろう。

なお、両古墳群周辺の丘陵地帯には数基の大型の円墳[3]が存在している（進藤1995）。その代表的なものとして、矢板市愛宕山古墳（円墳：直径40m）が挙げられる。本墳は小丸山古墳群の南東約１kmの丘陵突端に立地する。墳頂に愛宕神社社殿が建てられているが、全体的に保存状態は良好で、現在でも周溝が凹地となって残っている。墳丘には段築が認められず、社殿建立時に削平を受けていることを考慮に入れても、築造当初から墳頂平坦部は広かったと思われる。こうした特徴から、竪穴式系主体部を持つことも考えられ、現段階では築造年代は６世紀前葉以前の可能性があると指摘しておきたい。当古墳は２～３基の小円墳を伴って古墳群を形成しており、他の大型円墳も、それぞれに小円墳を伴っている。付近には坊山古墳群などの横穴式石室墳を含む群集墳の存在も確認されているが、これらの小円墳の多くは低平で、石材の露出や盗掘痕が見られないことから、小丸山古墳群、乙畑・大久保古墳群に類するものかも知れない。現状ではなお不明な要素が多いが、５世紀後半頃から６世紀中葉にかけてこの小地域の開発が目覚ましく進み、これを背景に台頭してきた勢力がこれらの円墳群を形成したものと推測したい。

【小貝川・五行川水系】鬼怒川支流の小貝川と、その支流の五行川は県東部を平行して南流し、特に五行川は流域に広い低地を形成している。

当地域の群集墳は主に五行川左岸と、小貝川流域の台地上に多数の分布が確認できる。特に小貝川左岸の芳賀郡益子町周辺は、県内でも群集墳が最も多い地域の一つとして注目される。後期群集墳に関しては、益子天王塚古墳を含め、いくつかの調査例があるが、一つの古墳群の全容を窺えるような広範囲の発掘調査例が極めて少ない。そのため、当地域の古式群集墳の実態については現在のところ不明である。そこでこの項では、中期から後期初頭にかけての時期で、

発掘調査等によって内容が確認されている古墳を列挙するにとどめておく。

まず、5世紀中葉の芳賀町芳香志戸十三塚古墳（円墳：推定直径30m）（中村1964･小森1989)、益子町新田山1号墳（損壊激しく墳形不明）（小森1987)、後葉の二宮町大和田富士山古墳（前方後円墳：全長約50m）（秋元ほか1984）などが挙げられる。芳香志戸十三塚古墳の周辺は五行川左岸でも古墳の分布密度の高い地区であり、特に近年、大型円墳の存在が注目され、これらを積極的に中期古墳として位置づける論考がある（橋本1999)。芳香志戸十三塚古墳の北方2㎞に存在した千が窪古墳（円墳：直径20m）（塙ほか1967）は調査前に墳丘が削平されてしまったため主体部等の詳細は不明だが、周溝から円筒埴輪・形象埴輪が多量に出土している。また、周溝外縁に接して埴輪棺1基が発見され、埴輪の形状から6世紀前半の築造とされる。また、五行川低地西側の段丘上では、円墳6基で構成される谷近台古墳群のうち剣塚古墳（錫杖塚古墳　円墳：直径20m）（大金1974）が発掘されている。主体部の箱式石棺から剣および鉄鏃が出土し、6世紀前半に位置付けられている。

次に、益子町周辺の群集墳を見ると、北部の小宅地区、市街地に隣接する道祖土地区、南部の長堤地区に特に集中している。近年、発掘調査された例としては、小宅地区に存在する向北原古墳群の1号墳が挙げられる（久保ほか1986)。当古墳群は現状では前方後円墳3基、円墳6基で構成されており、ゴルフ場造成に伴う記録保存調査のため1号墳が発掘調査された。本墳は直径約14mの比較的低平な円墳で、周溝が完周する。主体部は、墳頂部から掘り込まれた墓壙であり、底部に箱式石棺を設置していた。周溝から出土した土師器坏および甕の示す年代は6世紀前葉でも新しい時期であるが、主体部の形態を勘案して5世紀末から6世紀初頭の築造と考えられている。箱式石棺を有する点を除けば、規模および構造は先述の矢板市小丸山古墳群第1～3号墳に近いものがある。また1号墳の南300mに存在する8号墳は全長42mの前方後円墳であり、採集された円筒埴輪の形態が6世紀初頭の年代を示している（小森1987)。また、益子町の北に隣接する市貝町市塙横塚古墳群（前方後円墳2基、円墳3基）の1号墳（前方後円墳：全長42m）（関沢1979・小森紀男1990）も、出土した埴輪の年代により6世紀前半と考えられている。

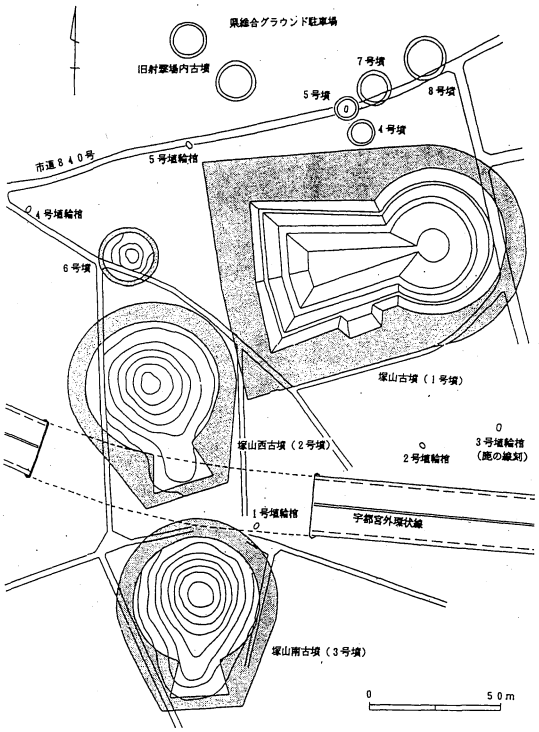
一方、南部の長堤地区では、先述の新田山古墳群が工事中に緊急調査されている。この古墳群は、宅地造成工事中に前方後方墳と円墳1基、墳形不明の1基の存在が確認された。1号墳はすでに削平が著しく、墳形は不明であったが、板状の石材が出土したことから、主体部は組み合わせ式の箱式石棺であったと思われる。排土中から矧板形式の皮綴短甲あるいは衝角付冑と思われる破片や円筒埴輪などが採取されており、5世紀中葉か頃に築造されたと考えられる。1号墳は、出土遺物などから判断して首長墳と考えられるが、古式群集墳出現直前頃の当地域の動向を考える上では看過できない存在である。

以上は限られた資料ではあるが、小貝川・五行川流域における古式群集墳の一端を垣間見ることができよう。

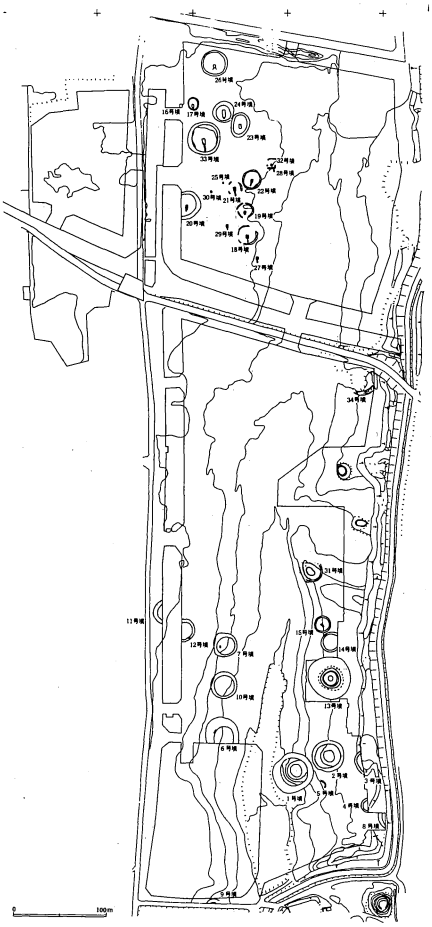
【田川水系】宇都宮市南部の東谷地区は、県内でも中期古墳が最も発達した地域である。田川左岸の微地高地上に立地する笹塚古墳（全長100m）は、５世紀第２四半期頃に出現した県内最初の本格的大型前方後円墳と考えられており（小森哲也1979)、南に隣接する鶴舞塚古墳（直径43m)、南東に位置する松の塚古墳（直径50m）などの大型円墳とともに東谷古墳群を形成している。さらに、平成7年度から当地区で進められている北関東自動車道建設に伴う発掘調査により、これらの大型古墳の墓域の北側に隣り合って、直径10m代の小円墳群が存在していたことが明らかになってきた（田代ほか1998･1999)。平成８～10年度に、松の塚古墳北側の路線部分が調査され、松の塚古墳の周溝外縁部、および北東にやや離れて、近接する９基の小円墳が発見された。このうち発掘段階で東谷遺跡Ｂ区S-3とされた直径10mの周溝からは、田辺編年ＴＫ-23並行の須恵器坏類９個体が一括で出土した。また、松の塚古墳を含め、全ての周溝埋土に榛名山起源のHr-FAの純層が確認されたので、これらの古墳が５世紀第３四半期頃に相次いで築造されたことが判明した。また、以上の小円墳の多くは、墳丘の削平により主体部の形状が不明であったが、S-65（直径12m）では基底部中央で長方形の墓壙が発見され、内部に箱式石棺が設置されていた。これらは笹塚古墳に後続する首長墓に並行する時期に形成された一種の古式群集墳と考えてよいであろう。

一方、東谷古墳群の北東1.5kmの西刑部西原遺跡には琴平塚古墳群が存在し、現在もその北に隣接する集落跡や、西側の杉村遺跡XII区で竪穴式系埋葬施設を有する円墳群の調査が続けられている。当古墳群は、全長52mの前方後円墳である琴平古墳を含む群集墳であり、平成９・11年度の発掘調査（中村2000）により、同一群内に竪穴式系埋葬施設を持つ円墳（直径８～22m）と、横穴式石室を有する前方後円墳が共存することが明らかとなった。前者のうち、４・６・７・９・11号墳の５基で粘土槨や組み合わせ式木棺を埋納した主体部が確認されたが、２号墳では組み合わせ式木棺の主体部を壊して横穴式石室が構築されていることが判明した。このように、当古墳群は古式群集墳として形成が始まり、後期群集墳の時期まで造墓が行われていたことが分かる。両者の間に時間的な開きが存在するのか、調査結果の分析が待たれる。

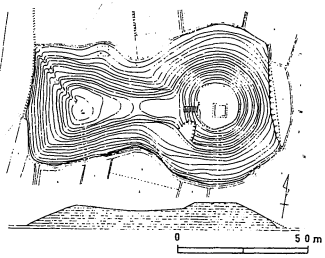
また、笹塚古墳にやや遅れて５世紀第３四半期（田辺編年TK-208段階）になると、田川低地と姿川低地の中間の台地上に宇都宮市塚山古墳（前方後円墳：全長98m）が築かれる。そして直後の塚山西古墳（帆立貝式古墳：全長63m）を経て、５世紀第４四半期（田辺編年TK-23･47段階）の塚山南古墳（帆立貝式古墳：全長59m）まで築造が続く。この塚山古墳群は、現状では上記の３古墳と、塚山古墳前方部西側の円墳６号墳（直径18m）が確認できるのみである。しかしかつては、塚山古墳後円部に隣接して小型の前方後円墳１基が存在したことや、北側に



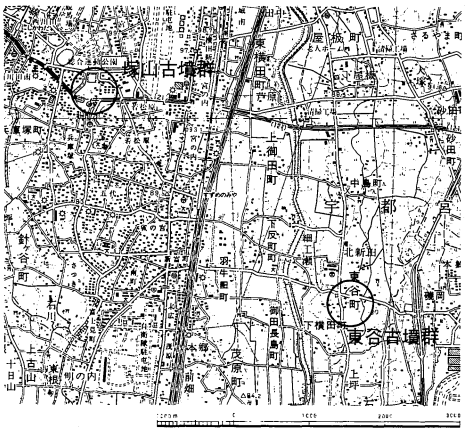
塚山古墳群全体図（宇都宮市教育委員会作成）

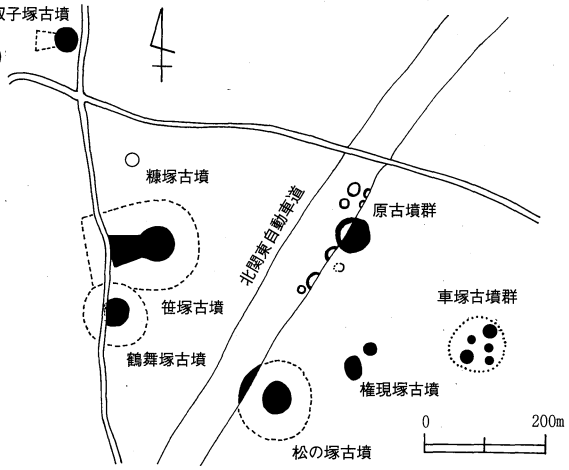


寺野東遺跡古墳群分布図（報告書より転載）



笹塚古墳（『栃木県史』資料編・考古一より転載）





東谷古墳群分布略図

第３図　田川水系の古式群集墳

直径10m代の小円墳６基および埴輪棺数基が分布していたことが、昭和30年代の航空写真や近年の保存を前提とする継続的な調査により明らかになっている（石部1990）。これらは主要３古墳に並行して形成されたと考えられ、先述の東谷古墳群における小円墳群の存在と共通点が見られるかも知れない。

なお、５世紀末から６世紀初頭には東谷古墳群の西方2.5kmの台地縁辺に、宇都宮市雀宮牛塚古墳（帆立貝式古墳：全長57m）（大和久1969）が出現する。本墳は古くに乱掘を受け、主体部の形状は不明であるが、画文帯神獣鏡等、三角板鋲留短甲、直刀、金銅製馬具、鈴釧および玉類などの豊富な副葬品を有し、これは後述する小山市桑57号墳、足利市助戸十二天古墳などとともに、中期末から後期初頭にかけて各地で出現する帆立貝式古墳とみなされている（註４）。ただし、県内のこのタイプの古墳は現状では単独で確認されている例も多く、大型首長墳との系譜関係や、群集墳との関連が必ずしも明確にはできない。副葬品の質･量から、畿内との関係が窺えるものの、位置づけについてはなお検討の余地があろう。

田川と鬼怒川の合流地点の南西約４kmの段丘縁辺には小山市寺野東遺跡が存在する。発掘調査の結果、調査区の南側に存在した古墳群は５世紀末から６世紀初頭にかけての古式群集墳であり、北側のものは６世紀後半から７世紀中葉にかけての後期群集墳であることが明らかとなった（津野1998）。南側では削平を受けていたものも含めて円墳17基が確認され、直径40m代のもの１基、30m代のもの4基を含んでおり、比較的大型の円墳で構成されていることが判明した。主体部は、墳丘が残存していたもの（１号墳：直径42m、２号墳：直径34m、31号墳：直径20m）では墳頂部で木棺直葬が確認された。また、６号墳（直径35m）では墳端部に設けた河原石積の竪穴式小石室が発見された。なお、同墳は、墳端の平坦部に円筒埴輪を巡らせており、周溝内から破片が多数出土した。凸帯は２条で、銀杏葉形線刻を施したものが存在することから、塚山古墳群との関連が指摘されている。本古墳群の南には茨城県結城市松木合古墳群（森田1984）が存在し、本来は寺野東遺跡の南側と同一の古式群集墳と考えられる。主墳の松木合浅間塚古墳（前方後円墳：推定全長40m）は後円部に粘土槨を有し、円筒埴輪などが示す年代から、５世紀後葉の築造とされる。当古墳群は浅間塚古墳の築造を契機に形成が開始されたと考えられている。北半部では横穴式石室のみ残存するものも含めて円墳17基が確認された。これらは北側に位置する後期群集墳の梁古墳群（福田1986）と同一の古墳群と考えられる。

【思川水系】思川は壬生町南部で黒川、小山市北部で姿川、県南端の野木町で巴波川と合流する。黒川、姿川、巴波川ともに流域には多くの古墳が分布するが、本稿では両者の水系に属する古墳も広義の思川水系として扱うことにする。

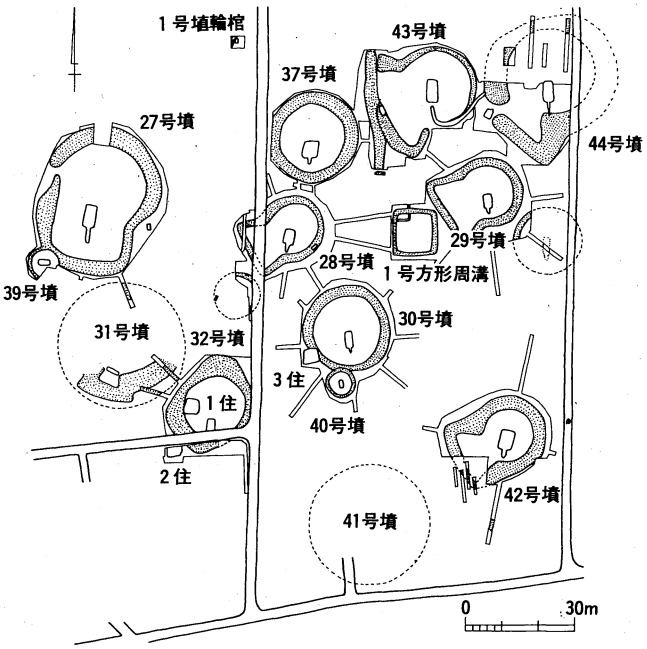
思川水系の中期古墳としては、まず、小山市南西の低地に立地する寒川古墳群（八巻ほか

1979・久保ほか1981）が挙げられる。当古墳群には確認できたものだけで、茶臼塚古墳（前方後円墳：推定全長77m）、三味線塚古墳（前方後円墳：推定全長55m）、毘沙門山古墳（帆立貝式古墳？：推定全長41m）、町田稲荷塚古墳（墳形不明）、鶴巻山古墳（円墳：直径53m）、その他円墳の茶臼塚西古墳（推定直径20m）、毘沙門山東古墳、鶴巻山北古墳、鶴巻山東古墳など、計14基が存在した。発掘調査の結果、鶴巻山古墳は５世紀中葉に位置づけられ、６世紀前葉の茶臼塚古墳を経て、６世紀中葉の三味線塚古墳（前方後円墳：全長55m）にいたるまで首長系列と考えられる大型の古墳が継続して築かれる。現在のところ上記の円墳群の具体的な様相は明らかになっていないが、首長墓に並行して築かれたものも存在すると考えられる。

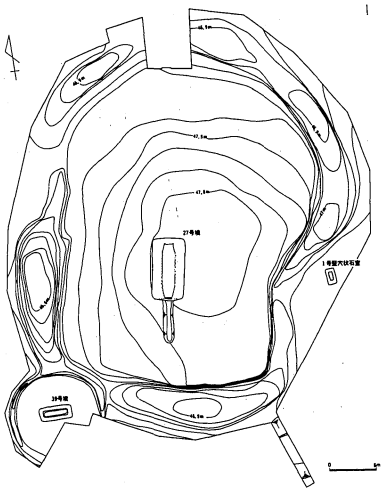
寒川古墳群の北東４㎞の、思川左岸台地上には小山市牧ノ内古墳群が存在する。平成２年度から７年度にかけて発掘調査され（秋山1996・1997）、横穴式石室を有する円墳、前期の方形周溝墓、竪穴式系埋葬施設を有する小円墳の三者が密集する古墳群であることが判明した。

思川と姿川の合流点東側の段丘一帯には多数の中小古墳が分布し複数の群集墳を形成している。喜沢古墳群（大和久ほか1981）もその一つで、合流点よりやや南東に位置する。本古墳群は南北両支群で構成され、北支群の主墳と考えられるのが桑57号墳（帆立貝式古墳：全長38m）（大和久1969）である。墳丘には葺石および二重の埴輪列がみられ、木棺直葬の主体部からは蛇行剣、変型竜虎鏡等銅鏡３面、銅鈴、金銅製天冠などの多彩且つ豪華な遺物が出土した。天冠や円筒埴輪（外面調整Ｂ種ヨコハケ）の型態から５世紀末から６世紀初頭にかけての築造と考えらてれる。北支群には、この他直径20m大の円墳など４基が確認できる。41号墳は桑57号墳に近似する埴輪（外面調整Ｂ種ヨコハケ）を持ち、その他の古墳にも57号墳同様の葺石が見られるなどの共通点が見られ、おそらく、これらは桑57号墳と近い時期に相次いで築かれ、古式群集墳を形成しているものと考えられる。なお、南支群には横穴式石室を有する前方後円墳もみられる。当古墳群の北方に連なる南半田古墳群の大日山１号墳では、Ｂ種ヨコハケに類する外面調整の円筒埴輪破片が採集され、本墳の築造が桑57号墳の時期まで遡る可能性がある（岩崎ほか1978）。桑57号墳の周辺一帯はこれまで中期古墳の顕著な展開が確認されていない地域である。しかし後期には下野国の中心地に急成長する地域の一角であるだけに、豊富な副葬品を有する桑57号墳や、周囲の古式群集墳の存在は、摩利支天塚古墳出現前夜の動向を明らかにする上で看過できない存在である。なお胎土分析の結果や、成作技法上から、桑57号墳と摩利支天塚古墳の埴輪の類似性を指摘する興味深い見解もある（三辻1985）。

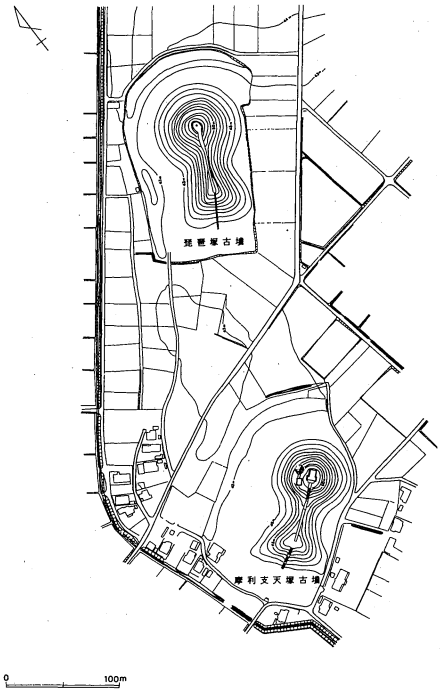
思川と姿川の合流点のやや北方に５世紀後葉の摩利支天塚古墳（前方後円墳：全長120m）（岩崎ほか1983）、６世紀前葉の琵琶塚古墳（前方後円墳：全長124m）（三沢ほか1979）が相次いで出現する。両古墳の築造を契機に形成が開始されたと考えられるのが、西側台地上に存在する飯塚古墳群である。小山市による継続的な調査（鈴木ほか1988）では、横穴式石室を有



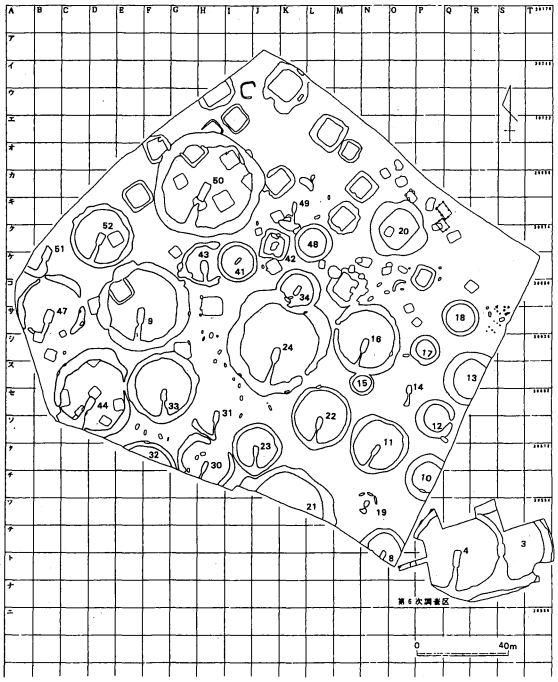
飯塚古墳群



飯塚古墳群　27・39号墳



琵琶塚古墳・摩利支天塚古墳



牧ノ内古墳群

第４図　思川水系の古式群集墳（報告書より転載）

する帆立貝式古墳が多数発掘されている。その中で、平成４年度に調査された31号墳（帆立貝式古墳：推定全長36m）では、くびれ部から木棺直葬の主体部が発見されている。現在遺物整理中につき詳細は今後の検討を待たねばならないが、現段階では６世紀前半頃の築造と推測されている。おそらく他の大型墳にも竪穴式系埋葬施設を有するものが少なからず存在すると考えられよう。しかし木棺直葬の小円墳である39号が、横穴式石室を有する27号墳の一部を破壊し築造されている事実も確認されており、本古墳群が古式群集墳から後期群集墳の段階へ継続的に移行していった様子が窺える。

次に、思川支流の黒川流域の様相を見たい。平成８・９年度に発掘調査された壬生町台畑狐塚古墳群（池田1999）は、黒川左岸丘陵上に存在する。調査範囲からは５世紀後葉（田辺編年TK-23～47段階）に築造された円墳３基と、側壁抉り込み土坑１基が発見された。円墳のうち２基は直径30m級で、残り１基は直径16mである。３号墳で木棺直葬の主体部が確認された。なお、古墳群の北西約40mには５世紀後葉になって形成される集落跡が確認され、古墳群形成母胎となった集落の一つと考えられている。

続いて巴波川支流の永野川流域をみると、大平町七廻り古墳群（大和久ほか1971・1974）、岩舟町小野巣根古墳群（常川1988）などに竪穴式系埋葬施設を有する円墳が存在する。七廻り古墳群は永野川右岸の大平山山麓に立地し、円墳10基で構成されていた。１号墳すなわち主墳の鏡塚古墳（円墳：直径28m）は基底部に舟形木棺を直葬し、馬具の形態や木棺の年輪年代測定結果から、６世紀第２四半期の築造と考えられる。２・３号墳は、ともに無袖式横穴式石室を有し、前者は６世紀第３四半期、後者は第４四半期に位置付けられている。

小野巣根古墳群は七廻り古墳群の南西2.5kmに位置し、円墳５基で構成される。１・２号墳は基底部に竪穴式小石室を有し、１号墳出土の環頭大刀や鈴杏葉などから６世紀第１四半期から第２四半期にかけての築造とされる。４号墳は古式の横穴式石室を有し、馬具などから６世紀第２四半期の年代が与えられている。

【渡良瀬川水系】渡良瀬川左岸に位置する足利市勧農車塚古墳（帆立貝式古墳：推定全長80m）（前沢ほか1988）、支流秋山川左岸台地上の佐野市八幡山古墳（推定円墳：推定直径46m）（前沢1955）が中期前半の築造と考えられ、中期中葉には支流巴波川右岸の低地に藤岡町（旧赤麻村）愛宕塚古墳（円墳か：推定直径27m）（大橋1984）が存在したが、全体として該期の動向は充分には確認されていない。５世紀末から６世紀になると渡良瀬川左岸、勧農車塚古墳の至近に足利市助戸十二天古墳（帆立貝式古墳：推定全長30m）（前沢ほか1985）が出現し、内行花文鏡、五鈴鏡、鈴杏葉、ｆ字形鏡板、三環鈴など豪華な副葬品が出土している。本墳は先述のとおり、宇都宮市雀宮牛塚古墳、小山市桑57号墳などとともに、中期末から後期初頭に相次いで出現する豊富な副葬品を伴う帆立貝式古墳として位置付けられている。しかし現在の

ところ、これに前後する時期の竪穴式系埋葬施設を主体とする古墳群は確認されていない。

Ⅳ　考察

以上、栃木県内の古式群集墳の動向を概観してみた。群集墳の分布密度が明らかに高いにもかかわらず、調査例が少ない地域もあり、資料の今一つの不均等に隔靴掻痒の感は拭いきれない。しかし、限られた資料とは言え、これまで観察してきた範囲内で、まとめてみたい。まず、古式群集墳の存在形態を以下の３つに整理してみた。

⑴　それまで有力な中期古墳が見られなかった地域に出現するもの。

⑵　中期政権の中枢部に出現するもの。

⑶　中期政権の本拠地からはやや離れているが、密接な関係を保ちながら営まれるもの。

⑴の類型は、結果的には那珂川流域や内川流域などの県北部の群集墳を指すこととなる。ここは前方後方墳を中心に前期古墳がとりわけ発達した地域であるが、５世紀に入ると目立った古墳が造られなくなる。そして５世紀後葉に入ると蛭田富士山古墳群や酢屋古墳群、やや時期が下って乙畑･大久保古墳群、小丸山古墳群などの古式群集墳が相次いで出現してくる。那珂川水系はもともと、前期古墳を支えるだけの潜在的な生産力を有していた地域である。事実、５世紀になると那珂川流域では三輪仲町遺跡・三輪遺跡・神田南遺跡・谷田遺跡、内川流域では十三塚遺跡などの集落跡が多数確認されるようになり、この時期に地域の開発が前期にも増して大きく進展したことを物語っている。一般的に、こうした生産力を基盤として台頭してきた新興勢力が群集墳を営んだものと解釈されており、当地域の場合も同様の理解が可能と思われる。この時期、東谷古墳群や塚山古墳群の大型首長墓の動向を見ると、規模の縮小化や移動が起こっており、中期政権が動揺を来していたことが窺える。その要因の一つが、このような地域の新興勢力の台頭に求められるのかも知れず、さらに、中期的な支配体制の弛緩が、元来生産力が高い遠隔地に群集墳造営をより一層促したと言えるのかも知れない。小丸山古墳群の積石塚（６号墳）の存在は、地域の新興勢力が開発のための新技術を個別的に導入していることを示唆しており、それまで有力な中期古墳が見られなかった地域の群集墳の一つのありかたを象徴しているようにも思われる。

なお、やや本題から逸れるが、この時期に、上記のような地域政権下の新興有力層を畿内政権が直接掌握しえたか否かについても触れておきたい。結論から述べれば、県内の古式群集墳においてはその公算は薄いと思われる。それは例えば、５世紀末から６世紀に入る時期に県内最大の摩利支天塚古墳、琵琶塚古墳が出現し、依然として地域政権の弱体化が見られないこと、そして飯塚古墳群のような、地域政権と密接な関係のもとに形成が始まる大群集墳が存在する事実などからも推測でき、６世紀に入ってもなお地域の共同体秩序の頂点に君臨する大首長の

姿が受け継がれているからである。新興首長層の中には畿内政権と直接交渉を持ったものが存在しても、その下の有力家長層は依然地域の伝統的な体制の下で首長に属していたものと考えたい。古式群集墳に強い地域的特色が見られることは、これを裏付けていよう。

次に本県の中期政権の根拠地と考えられる東谷古墳群および塚山古墳群周辺では、近年の発掘調査の結果、大型首長墓の墓域内あるいはそれに極めて近い場所に小円墳群が存在することが明らかとなってきた。これを⑵の類型とする。⑴類型の群集墳は、成立要因において中期政権と相対するものと理解したが、中期政権の内部に出現してきた小円墳群はどのように解釈できるであろうか。現在、東谷地区ではこれらの円墳群の他に、豪族居館跡、祭祀遺構、集落跡などが発掘され、本県における中期政権中心地の実態が明らかになりつつあるが、このような場所に存在する小円墳群と、⑴で述べた群集墳とは、形態上は近似していても、成立要因・性格等において違いがあるものと考えられる。これらの被葬者は大首長と強い同族関係をもっていた可能性が指摘でき、例えば⑴の台頭に象徴される動きに対処するための中期政権内部の結束姿勢を直接反映しているのかも知れない。いずれにしても詳細な分析は正式の報告結果を待ちたいが、現時点では以上のような推測にとどめておく。

⑶については、寺野東遺跡を例に挙げたい。寺野東遺跡の古式群集墳には塚山古墳群に多く見られる銀杏葉形線刻を有する円筒埴輪が使用されていることは先にも述べた。また、本古墳群被葬者層が周辺の滑石製模造品を製作する集団を統括し、製品を塚山古墳群の首長に貢納するような立場にあったとする見解（津野1998）もあり、いずれからも、本古墳群が塚山古墳群の首長に従属的な関係を持つ集団の墓域であったことが指摘できる。このように、中枢部からさほ遠くない地域で、中期政権下の特定の職種などを担う集団が古式群集墳を形成している場合が指摘できそうである。

以上、それまでの中期地域政権およびその系譜を引く勢力との関連の強弱によって群集墳の大別を行ったが、さらに詳細な検討を行うことで、より複雑な様相を示すことになろう。例えば、⑵の円墳群の中に箱式石棺を持つものが存在し、⑴に分類した県北部の群集墳との関連をどのように見るか、また、発掘調査を経ていない資料、特に大形円墳に関しては、築造時期が中期中葉以前と後葉とでは性格が大きく異なるため、注意したいと考えている。

最後に、再三取り上げてきた矢板市小丸山古墳群６号墳についてあらためて触れておきたい。本墳は平成４年度の発掘調査により、県内では初めて確認された積石塚古墳となった。出土した鉄鏃などから６世紀前半頃の築造と考えられる。積石の平面は長方形（長軸約５ｍ）を呈し竪穴式小石室を主体部とする点などは、近年群馬県高崎市剣崎長瀞西遺跡で確認された積石塚古墳の形状に通じるものが見られる。県内の古式群集墳では、小丸山古墳群に隣接する通岡１号墳をはじめ、板石使用の箱式石棺が多く見られるが、本墳では扁平な河原石を層状に積み重

ねて壁体を構築しており、明らかに「石室」的な構造となっている点が特異である。また、北東２㎞に存在する十三塚遺跡第６号住居跡からは５世紀後葉の鉄製鑣轡が出土しており、あえて言うならば古墳時代中期後葉から後期前葉にかけて、この地域の開発に渡来系の技術が関わっていたことを示唆していると言えよう。類似の資料の増加が待たれるが、県内の古式群集墳を考える上で、こうした視点も今後注意すべき点であろう。

Ⅴ　おわりに

群集墳の出現には古墳時代中期の政治的・社会的変動が強く反映されている事実については、県内の古式群集墳を観察する中でも次第に明らかになってきた。繰り返しになるが、今日、群集墳に対する有力な解釈は、以下のとおりである。すなわち、中期における「文化的・社会的開明」により、首長層の下では新興中小首長と有力家長層が台頭し、中期的政治体制に動揺をきたすようになった。ヤマト政権は、地域のこの情況に目をつけ、従来地域首長の下にあった有力家長層を、より直接的に掌握することで、地域政権の弱体化を画策した。その掌握の結果出現したのが群集墳ということになる（和田1992)。県内の中期大型首長墓の動向を見るかぎりでは、この「弱体化」策がこの地方にも影響を与えた可能性は否定できない。地域の開発が飛躍的に進んで生産力が増大したとしても、各地で時期を同じくしてそれまでの中期古墳の動勢変化が見られるようになるのは、その背後にやはり、畿内政権からのはたらきかけがあったと解釈すべきなのであろう。豊富な副葬品を持つ帆立貝式古墳の存在も、新興中小首長層と畿内政権との密接な関係を想起させる。しかし、その下位に位置する群集墳の示す強い地域色や、120m代の摩利支天塚古墳、琵琶塚古墳の出現などからは、やはり畿内政権による地域政権の末端までの掌握がこの段階ではまだ困難であったと考えられる(4)。

今後は同様な視点から後期群集墳の動向も交えてあらためて検討を進めてみたい。

註

(1)　小川町吉田・新宿古墳群では主墳の吉田温泉神社古墳（前方後方墳：全長59m）の周辺で７基の方墳が調査された。また、佐野市松山・五本松Ⅱ・北久保Ⅱ遺跡でも主墳の松山古墳（前方後方墳：全長44m）に隣接して方墳17基以上が発見されている。

(2)　(2)参照

(3)　岩崎卓也氏や小森紀男氏が小野山節氏の論考（1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』16-3）を取り上げ、帆立貝式古墳について論じている（岩崎1984・小森1988)。

(4)　この点に関して和田氏も、６世紀後葉の関東の古墳の構成は「群集墳がなければ、畿内の前期古墳のそれに近いもので、そこには共同体的規制の強く残る伝統的な土豪的首長層の存在が推測されるのである。」と述べて、強い地方色を指摘している（和田1996)。

参考文献

秋元陽光･斎藤弘　1984「芳賀郡二宮町大和田富士山古墳について」
『栃木県考古学会誌』第８集　栃木県考古学会
秋山隆雄　1996「牧ノ内古墳群」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報18』栃木県教育委員会
秋山隆雄　1997『牧ノ内Ⅰ』小山市教育委員会
池田敏宏　1999『台畑遺跡・谷向遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
石部正志　1980　「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』４　朝鮮三国と倭国　学生社
石部正志　1992　Ａ「塚山古墳」『宇都宮市文化財年報』第８号　宇都宮市教育委員会
石部正志　1992　Ｂ「４　群集墳論」『古墳時代の研究』第12巻　雄山閣出版
岩崎卓也ほか　1978「小山市域の円筒埴輪」『小山市史研究』1　小山市史編さん専門委員会編
岩崎卓也ほか　1983『摩利支天塚古墳』小山市教育委員会
岩崎卓也　1984「６　古墳時代の栃木県」『小山市史』通史編Ⅰ
岩崎浩恵　1996『乙畑･大久保古墳群』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
大金宣亮　1974『錫杖塚古墳発掘調査概報』芳賀町教育委員会
大川　清　1978『酢屋古墳群』湯津上村教育委員会
大橋泰夫　1984「藤岡町（旧赤麻村）愛宕塚古墳・第四号古墳の埴輪について」『栃木県考古学会誌』第８集　栃木県考古学会
大和久震平　1969Ａ『桑57号墳発掘調査報告書』小山市教育委員会ほか
大和久震平　1969Ｂ『雀宮牛塚古墳』宇都宮市教育委員会
大和久震平ほか　1971『大平町七廻古墳群』大平町教育委員会
大和久震平ほか　1972『蛭田富士山古墳群』栃木県教育委員会
大和久震平　1974『七廻鏡塚古墳』大平町教育委員会
大和久震平ほか　1981「8　喜沢古墳群」『小山市史』資料編・原始　古代
久保哲三ほか　1981「四　寒川古墳群」『小山市史』資料編・原始　古代
久保哲三・後藤喜八郎　1986『益子･向北原1号墳』益子町教育委員会
小森哲也　1979「宇都宮市笹塚古墳出土の円筒埴輪の年代的位置づけ」『峰考古』2号
小森哲也　1987Ａ「新田山古墳群」『益子町史』第１巻　考古資料編　益子町史編さん委員会
小森哲也　1987Ｂ「向北原古墳群」『益子町史』第１巻　考古資料編　益子町史編さん委員会
小森哲也　1999「３調査研究活動」『栃木県立なす風土記の丘資料館年報』第７号
小森紀男　1988「しもつけにおける前方後円墳の出現と展開」『前方後円墳の時代- しもつけにおけるその出現と展開-』　栃木県立しもつけ風土記の丘資料館）
小森紀男　1989「栃木県芳賀町芳志戸十三塚古墳の検討- 石製模造品類を中心として-」
『栃木県考古学会誌』第11集栃木県考古学会
小森紀男　1990「市塙横塚古墳群」『市貝町史』１巻
近藤義郎　1952『佐良山古墳群の研究』第１冊　津山市
近藤義郎　1983『前方後円墳の時代』　岩波書店
進藤敏雄　1995『小丸山古墳群　山苗代Ａ･Ｃ遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
進藤敏雄　1995「矢板市南部の群集墳について」『唐澤考古』14　唐沢考古会

進藤敏雄　2000「栃木県の群集墳」『群集墳の時代』第14回企画展　栃木県教育委員会
鈴木一男ほか　1988『飯塚古墳群発掘調査概報Ⅰ』小山市教育委員会
鈴木　勝　1981「木幡神社古墳の墳丘について」『栃木県考古学会誌』第6集　栃木県考古学会
竹沢　謙ほか　1972　「23.通岡遺跡」『東北縦貫自動車道　埋蔵文化財発掘調査報告書』日本道路公団　東京支社　栃木県教育委員会
田代　隆ほか　1998「東谷遺跡群」『埋蔵文化財センター年報』第９号（平成11年度）　㈶栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
田代　隆ほか　1999「東谷遺跡群」『埋蔵文化財センター年報』第10号（平成12年度）　㈶栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
辰巳四郎ほか　1975『二ツ室塚発掘調査概報』・長谷川操1989「二ツ室塚古墳・上ノ原遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報（昭和63年度）』栃木県教育委員会
常川秀夫　1988『小野巣根古墳群４号墳』岩船町教育委員会
津野　仁　1998『寺野東遺跡Ⅶ（古墳時代墳墓編）』　栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
中村享史　1999『十三塚遺跡』栃木県教育委員会・㈶栃木県文化振興事業団
中村享史　2000「西刑部西原遺跡Ⅱ区」『埋蔵文化財センター年報』第10号（平成12年度）　㈶栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
中村紀男　1964「芳賀郡芳賀町芳志戸出土の滑石製模造品」『栃木考古学研究』No.1
橋本澄朗　1999「東国の中期古墳二関する二・三の問題　ー栃木県の事例を中心としてー」『東国土器研究』第５号
橋本澄朗　1999「芳賀町の遺跡の概要について」『芳賀町遺跡分布調査報告書』芳賀町教育委員会
長谷川操　1994「酢屋古墳群」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報（平成４年度）』栃木県教育委員会
塙静夫ほか　1967『千が窪古墳』芳賀町教育委員会
広瀬和雄　1978Ａ「群集墳論序説」『古代研究』15　元興寺文化財研究所
広瀬和雄　1978Ｂ「群集墳研究の課題と方法」『歴史科学』96　大阪歴史科学協議会
福田定信　1987「⑳梁古墳群」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報（昭和61年度）』栃木県教育委員会
前沢輝政　1955「佐野市八幡山古墳調査概報」『古代』第16号　早稲田大学考古学会
前沢輝政ほか　1985「助戸十二天古墳第１次･第22次発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報』　足利市教育委員会
前沢輝政ほか　1988「勧農車塚古墳第１次発掘調査」『埋蔵文化財発掘調査年報』足利市教育委員会・足利市遺跡調査団
三沢正善ほか　1979『環境整備事業に伴う琵琶塚古墳発掘調査概報』小山市教育委員会
三辻利一　1985「宮内２号墳出土須恵器、および、周辺の古墳出土埴輪の胎土分析」『宮内北遺跡』小山市教育委員会
森田久男　1984「7　小山の古墳」『小山市史』通史編Ⅰ　自然　原始・古代　中世
八巻一夫ほか　1979『茶臼塚古墳群　小松原遺跡』栃木県教育委員会
和田晴吾　1992「14　群集墳と終末期古墳」『新版　日本の古代』第５巻　近畿Ⅰ　角川書店
和田晴吾　1996「見瀬丸山・藤ノ木古墳と６世紀の大和政権」『日本の古代をひらく　情況』　５月別冊
和田晴吾　1998「古墳時代は国家段階か」『古代史の論点』４　権力と国家と戦争　小学館